様式　1

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

学 位 申 請 者	西井　智子	
論 文 担 当 者	主　査	垣淵　正男
	副　査	越久　仁敬
	副　査	五味　　文
学 位 論 文 名	Earlier Recovery of Lingual Dysfunction After Middle Ear Surgery in Pediatric Versus Adult Patients （ 中耳手術後の舌知覚の早期回復－小児と成人の比較－ ）	

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

中耳手術による鼓索神経の障害によって味覚障害が生じるとされ、体性感覚障害に起因すると考えられる舌のしびれも発生する。小児は成人と比較して術後味覚症状の訴えや味覚機能変化は少ないと考えられてきたが、小児における正常な舌体性感覚機能や術後変化についての報告はなかった。

学位申請者は、小児における味覚と舌三叉神経感覚の正常な閾値を測定し、中耳手術後の同機能の経時的変化を成人と比較検討した。

2009 年～2019 年に中耳手術をおこなった 7～18 歳の小児患者 59 人と 19～66 歳の成人患者 106 人を対象に、鼓索神経切断例と温存例に分けて、術前および術後 2 週間、術後 6 ヶ月時点の味覚や舌しびれについて問診し、味覚と舌体性感覚閾値を測定した。

その結果、術前の健側における味覚と体性感覚は小児が成人よりも有意に閾値が低かったが、健側と患側の間の有意差は両者とも認めなかった。術後 2 週間では、鼓索神経操作に関わらず、小児と成人の間で味覚症状の発生率に差は生じず、術後電気味覚閾値は小児、成人ともに有意に上昇した。舌のしびれは小児で有意に少なく、舌体性感覚機能は成人で有意な閾値上昇を認めたが小児では術前と有意差を認めなかった。鼓索神経切断群で小児の電気刺激閾値の上昇率は成人と類似していた。術後 6 ヶ月では、味覚異常の訴えと電気味覚閾値の異常率は小児の方が低かったが、鼓索神経切断例では閾値異常率に統計学的な差は 認められなかった。舌のしびれはほとんどの小児で消失し、二点識別閾検査と電気刺激検査は正常化していた。

以上より、中耳手術後に小児は味覚機能のみならず舌体性感覚機能も障害をうけること、小児は成人よりしびれ症状を訴える頻度が低く回復も早いことが分かった。

申請者が本研究において示した内容は、小児の耳手術における鼓索神経の機能障害を成人と比較した重要な知見であり、学位授与に値すると評価した。